

広島芸術学会活動報告

平成三十(二〇一八)年七月一日(令和元(二〇一九)年六月三十日)

▼平成三十年七月二十七日付で「藝術研究2018」(年報第三十一号)を発行した。

▼平成三十年九月二日

広島市立大学サテライトキャンパス(セミナールーム1)において、平成三十年度総会および第三十二回大会を開催した(当初、七月二十九日にサテライトキャンパスひろしま大講義室五〇二で開催予定だったが、台風一二号の影響のため、このように変更)。総会参加者数は二十三名、大会参加者数は三十三名。

総会は大島徹也事務局長の開会のことば、青木孝夫会長の挨拶の後、末永航を議長に選出し議事を進めた。まず、第一号議案「平成二十九年年度事業報告並びに決算について」について、資料にもとづき事業報告および決算報告が大島事務局長からなされ、続いて、樋口聡監査および船田奇岑監査による監査の報告が船田監査よりなされ、審議の結果、承認された。次に、第二号議案「平成三十年度事業計画並びに予算案について」について、資料にもとづき事業計画および予算案が大島事務局長から説明され、審議の結果、承認された。最後に、第三号議案「委員選挙および平成三十・三十一年度役員について」は、まず平成三十年度はじめに実施された委員選挙の結果と会長・副会長の選任等について、大島事務局長から報告がな

された。選挙により選出された委員は青木孝夫、大島徹也、桑島秀樹、城市真理子、末永航、菅村亨、関村誠、谷藤史彦、馬場有里子、山下寿水の十名(五十音順)で、これらの委員の互選により、青木孝夫が会長に、末永航が副会長に就任した。その後、会長が指名し総会による承認を必要とする委員五名には伊藤由紀子、今井みはる、柿木伸之、西原大輔、福田道宏(五十音順)、委員会が選出し総会による承認を必要とする監査二名には樋口聡、船田奇岑(五十音順)が選ばれたことが大島事務局長から報告され、審議の結果、承認された。また、会長が指名する幹事に石松紀子、兼内伸之介、山本和毅の三名(五十音順)、事務局長に大島徹也、事務局員に菅村亨、石松紀子が就任したことが大島事務局長から報告された。すべての議事審議が終了後、青木会長の挨拶があり、閉会した。

大会は、研究発表(三件)とシンポジウムを行った。研究発表は、①谷川ゆき(海の見える杜美術館学芸主任)「海の見える杜美術館所蔵《十番切絵巻》について」、②石松紀子(広島市立大学)「一九六〇年代から一九七〇年代のマレーシアにおける美術と社会の関係性について」、③宮地英和(広島経済大学)「障がい者の創作活動支援について」。シンポジウム(近代建築福山研究会との共催)は「明治維新百五十年に住宅建築・住まい方の問題を考える」を

テーマとし、パネリストは谷藤史彦（ふくやま美術館相談員・前副館長）、千代章一郎（広島大学准教授）、前田圭介（建築家・広島工業大学教授）、中村圭（広島市立大学講師）の四名。※前田氏は新日程での登壇調整がつかず、当日は欠席。上田寛之氏（UID建築設計事務所）が前田氏の発表原稿を代読。

▼平成三十年十月二日

会報第一四九号を発行。巻頭言は今井みはる（公財）みやうち芸術文化振興財団・アートギャラリーミヤウチ学芸員）の「自分のタグを増やす」。第三二回大会のシンポジウムの報告は宮地功氏（非会員／福山大学教授、近代建築福山研究会委員）が執筆した。

▼平成三十年十一月三日

第一二四回例会として、山口県立美術館の「没後四〇〇年 雲谷等顔展」およびコレクション展「修理完成記念 雪舟《山水図巻》の謎」の鑑賞と、トークイベント「日本美術応援団 雲谷等顔を応援する in 山口!!」（於 山口県教育会館）の聴講を行った。参加者数は七名。

▼平成三十年十一月二十二日

会報第一五〇号を発行。巻頭言は西原大輔（広島大学大学院教授）の「文学研究は政治的正義を主張する場なのか」。また、末永航（美術評論家）による第一二四回例会の報告を掲載した。

▼平成三十年十二月十五日

広島市立大学サテライトキャンパス（セミナールーム）におい

て、第一二五回例会を開催した。研究発表は①劉敏（広島大学大学院総合科学研究科博士後期課程）の「明治期の美育としての女礼式について」、②古賀くらら（広島市立大学助教）の「日本絵画における画材料の変遷―画法書に記載された彩色料にもとづいて―」。参加者数は二二名。

▼平成三十一年二月十九日

会報第一五一号を発行。本号より会報が電子版となった。

▼平成三十一年三月四日～十一日

芸術展示第一一回展「再考！人間と自然」を開催した。広島県立美術館県民ギャラリーを会場とした。総入場者数は五百三十名。詳細は別掲の報告のとおり。

▼平成三十一年三月九日

広島大学（東広島キャンパス）学生プラザ多目的室一・二において、第一二六回例会を開催した。研究発表は①郭陸歆（広島大学大学院生）の「李卓吾の『童心説』と本居宣長の『もののあはれ論』をめぐる比較美学的考察」、②金好友子（広島大学大学院生）の「唐津焼奥高麗茶碗と高麗茶碗の造形比較―土見せ表現に着目して―」。展覧会紹介レクチャーとして、吉川昌宏（奥田元宋・小由女美術館学芸員）の「吉村芳生の活動と広島との関わりについて」。参加者数は二十四名。

▼令和元年五月十三日

会報第一五二号を発行。

▼令和元年六月十五日

第一二七回例会として、尾道のアートベース百島と光明寺會館を見学し、それぞれのスタッフから活動内容について解説していただいた。参加者数は七名。

◆会員状況

二〇一九年六月三〇日現在、法人会員二法人、個人会員百九十五名（一般会員百四十二名、学生会員五十三名）

※文中、当学会会員については敬称を略させていただきました。また、肩書さは当時のものです。

事務局